

深尾須磨子の肖像

宮澤 健太郎

はじめに

深尾須磨子の作品は、その人の名前ほど知られていない。女流でしかも諧謔に満ちた詩人であるから、かつての男性優先社会体制の中では、到底受け入れられなかった。現に「天の鍵」という処女詩集に序文を寄せた森鷗外でさえも須磨子の詩には「些かのアンチパシイ（反感）さへ起こって来ようとする」と書いている。しかし今須磨子の作品を読み直してみると、その斜に構えた姿勢と精神構造が現代人の心を妙に揺さぶるのに気づく。鷗外もその点については、そういう反感感情を起させたが故にこの詩人の意味の重要さを認めていたことになる。

生い立ち

須磨子は明治21年（一八八八）11月18日、兵庫県氷上郡春日町の旧家に生まれた。本名、荻野志げの、7人兄弟の末っ子。父は小次郎、母は喜志恵。子供が多かったので生活も苦しく、須磨子8歳の時、叔父である山内家の養女に

出されたが、叔父叔母の関係が悪く、須磨子は一度実家に戻された。11歳の時、大阪の叔父の弟のところに寄宿したり、商家に備わられて子守りなどしたという。15歳の時京都師範学校に入学。しかし、服装や突飛な言動のために退学処分となったという。例えば、学校では「源氏物語」に耽溺するあまり、わかば、といった源氏名をつけて（与謝野）晶子ばりの歌を詠んだり、派手な緋に深紅の袴で通学したり（町田志津子「現代詩入門」といった目立った生徒、つまり近代流に言えば不良少女だったらしい。良い意味での不良とは、しかし、これは頭の良い事を意味していて、たとえば、石川啄木をはじめいろいろな世界で大成する人々の若い時によく見られることだ。

夫への思い

師範を放逐された須磨子は、菊花高等女学校に編入し、ここでも宮澤賢治のように劇を作ったり、歌を作ったり、自由自在に振る舞って明治40年（一九〇七）3月に無事卒業した。23歳（明治44年、一九一一）には結婚準備のため再び山内家の養女となり、24歳で2歳年上の鉄道技師、深尾贊之丞（いんのじょう）と結婚した。この時須磨子は旧名、志げの、を須磨子と改名した。理由は不明だ。夫への愛情が深かったかどうかは不明だが、贊之丞は音楽、語学、文学への造詣が深く、ことに須磨子への愛情は強かったといわれる。須磨子は夫の触発を受けてバイオリンやフルートを習ったという。しかし、この贊之丞も須磨子33歳の時（大正9年、一九二〇）35歳の若さで急逝してしまった。この後、夫の遺稿詩集「天の鍵」（大正10／6、森鷗外の序文付き）の中で、須磨子は夫への素直な気持ちを次のような詩にしている。

〈かはいさうな彼〉

かはいさうな彼

生まれる時から寂しさをもって生まれて、

その暗いかげから遂に離れえないで

自分のきらひなお役所に

朝から晩まではたらいで、

作りたい詩も作る時をもたず、

先祖の遺産に手をつけるのを畏れて

買いたいピアノさへ買はないで、

ただだまって、ただためいきをして

銘仙の布団ぐらいを着て

三十五で死んだ彼

ああ、かはいさうな彼

けれども、後に残って、

こんなことまで思はねばならぬ私は、

彼以上にかはいさうだ。

5

10

15

ああ、かはいさうな彼、
かはいさうなわたし。

むろん、祖先ばかりに遠慮して早死にをした、気のちいさな彼はたしかに可愛いそうだが、それ以上に、そんな彼に取り残された私は、もったかわいそうだ、どうして私より早く逝ってしまったの、私困るじゃないの、と夫への惜別を逆説的に訴える。このようなパラドキシカルな表現をする詩人は当時皆無に近かった。強いて言えば、雑誌「明星」で与謝野晶子が弟の出征に送った詩で、「君死に給ふこと勿れ（旅順包囲軍の中にある弟を歎きて）」（明治37／9）と高らかに反戦を逆説で歌った中にそれを感じることができる。

大正12年（一九二三）に関東大震災を経験した須磨子は、その後五回の海外逃避を試みた。1回目は大正13年から昭和3年までヨーロッパへ。2回目は昭和5年から昭和7年までヨーロッパへ。3回目は昭和14年に外務省の文化使節としてフランスへ。4、5回目はいずれも中近東地域やロシア方面に足をのばして異国を肌で感じて帰って来た。

詩人としての出発

須磨子は、大正14年（一九二五、須磨子38歳）には詩集「斑猫」、「呪詛」、「焦燥」などを出版して女流詩人としての位置を明確にした。当然、同時期の男性文壇の影響も多大に受けてはいるものの、やはり女流詩人の独立を強く意識していたと思われる。須磨子が対象としていた作家としては北原白秋、宮澤賢治、森鷗外、夏目漱石、竹久夢二などであったという。とくに白秋のマザーグースの翻訳はすでに大正10年（一九二二）に出ていたし、マザーグース

個々の作品はさらに早い時期（明治39年頃）に白秋や夢二によって競作のように発表されていた。また夢二は早稲田の先輩、坪内逍遙の英国留学のお土産、テイベアとマザーグースに初めて接して、本来の画家または詩翻訳の道に開眼したのではなからうか。夢二は東京外大をでていたので語学力に問題はなかっただろうから。

幅の広さ

女流の詩人会は、永瀬清子によれば昭和12年（一九三七、須磨子50歳）ごろ須磨子を中心に、壺田花子、井上淑子、高橋たか子、大野良子、鈴木初江、江間章子、中村千尾など15、6名をもって結成された（武田隆子「深尾須磨子の世界」一九八六、宝文館）。ここでも須磨子は「男性の詩人は横暴で女性をことさらにみとめようとはしない。それに対し女性は作品を持って対抗しよう」といい、その行動の先鋒となった。

また、ヨーロッパ留学の際パリで作家コレットに文学を、モイーズにフルートを、パリ大学でトゥールーズ博士に生物学を学び、とくに生物学の知識は須磨子の性科学の詩となって成果をみた。例えば「イヴの笛」（昭和11年、一九三六、須磨子49歳）の『今日の花』を掲げよう。

今日の花

花

いはゆる赤いおべべ

いはゆる一張羅

それでいけなければ

春の謎謎！

花冠

このみごとな

性という字の

くずし方をごらん下さい

花期

花子と花吉が

花馬車に乗って通ります

らんまん！

繁殖

風が吹くとさすがにさかりの花は

とかく習慣の扇をかざしたがります

花花の亡霊が鳩になつて

花花の上へのりうつる時です

受粉

縁組は

なるべく遠国ものどうしにかざります

雌雄

じれったくても我慢をして

待っているのが花子の役目です

訪ねてゆくのは勿論花吉の役目

飛行機 乗馬 モーターボート オヨギ

彼はそれらが大得意です

花蜜

はて

只で甘みが嘗められるとは

むだ花

えへん！

近頃はやりの

バスコントロールとは

どんなものでせう

悲運

あれ！

鋏の音がきこえます

開花期

とり乱した花花が

急に居ずまいをなほして

大きな大きな声を聴きます

受精！

花花は惜しげもなく死んでゆきます

これは性教育の詩である。生物学的な立場で生命をみて、正しい性の摂理を韻文で、その神秘を理解させようとする。これも渡欧から学んだ成果であろう。

このように男子社会からの脱皮、性教育の実践と、実績をあげてきた須磨子も昭和14年（一九三九）、日本の同盟国ドイツ、イタリアへの文化使節として派遣された事や作詞活動で軍歌を作った事などから、社会主義作家、宮本百合子などから右翼、とのレッテル貼られたこともある。戦後になって、本人も翼賛会的な活動については自己批判せざるを得ないこともあって、本来の女性活動家の面子を汚したようだ。

与謝野晶子への傾倒

もともと晶子に惹かれたのは、その晶子の情熱に向ってであって、つまりは晶子の浪漫思想への傾倒だということになるだろう。前述のように晶子は弟の命と国家とを計りにかけて、弟の方を選んだ。つまり、個人の尊厳を高く評価していかなる公権力もそこに立ち入るのを許さなかった。そのこと自体が男女の恋愛至上へと連なるわけで、実生活でも「明星」を通じて短歌の師、与謝野鉄幹をめぐって山川登美子と三角関係をなして、その戀を成就させる、というような大胆なロマンを実践した実行力の人でもあった。そして短歌のなかにその理念を潜り込ませたといえる。ギリシヤの悲劇詩人サッフォに晶子をなぞらえた須磨子だが、自分自身も夫をなくしてから、一度燃えるような恋を

した。その相手こそ平戸廉吉であった。

平戸廉吉

廉吉は明治26年（一八九三）、大阪に生まれ、上智大学に入学した後3年で中退後、暁星でフランス語を学び、詩学を学んだ。直後にマリネットイラによる未来派運動に共感し「日本未来宣言」を提唱、日本に於ける未来派を誕生させた。未来派とは従来の自然主義や浪漫主義、象徴主義とは全く異なり、視聴覚その他諸々の人間の感覚に訴える新感覚文化芸術運動であった。奇妙きでれつ、人がアレ！と思うような奇異な技法を駆使した表現活動運動であった。しかし、廉吉は大正11年（一九二二）肺結核のため29歳という若さで他界した。その病床にいた5歳年下の廉吉に須磨子は戀をした。亡くなる年の1月頃から須磨子は多数の励ましと恋情の手紙を書いた。その一部は次の様なものだ。

我が胸に咲く火の薔薇より、須磨子。

1月26日の須磨子の手紙の結びだ。この恋情が恋と言えるものなのか、同情からきたもののかは置くとして、廉吉の未来派運動が須磨子に新しい感覚を呼び起こしたのは確かな事だ。

須磨子の見聞録

須磨子は実に旅行好きだった。世界中南半球以外は殆ど歩いていて、それぞれの国の事を詩編に残している。昭和

40年（一九六五）の旅行記「むらさきの旅情」はそれらの集大成であり、詩編を交えてそれぞれの国の感性を残している。女性詩人の目を通しての観察力の鋭さは抜群だ。さらに、このむらさきの色こそ、源氏物語の女主人公、紫の上その人のことであり、その人に自分をだぶらせ、幻想上の空間、高貴な霊的世界をたくみに演出している。須磨子と同じ女流詩人サツフォの生まれたギリシヤの地も勿論須磨子は訪れたが、そのサツフォの恋の悲劇も、与謝野晶子やおのが身にも重ねて、追体験した風にも見える。その地中海の島ミチレネで、私は生きているあなたを見た、とサツフォの影を幻視している。その後須磨子は東欧、ロシア、中国などで見聞を広め、それぞれの国の顔を自分にだぶらせた詩を多く作っている。それが詩人須磨子の特性でもあった。

婦人運動

日本が戦争に負けた昭和20年（一九四五）以後の活躍は以前より目覚ましい。宮本百合子にファシズムと罵倒され、確かに戦意高揚のまった中にいた我が身を振り返って、今度は逆に反戦婦人運動の旗手として立ち上がった。各種の婦人集会に出かけ、婦人平和大会や原水爆禁止世界大会、世界民主主義婦人大会などで、詩や子供におくる詩など沢山の作品を残した。

失われた千万の

かえらぬいのちを嘆きかえし

なきかえす千万の母の苦悩

その苦悩を新たに

わが子をかき抱く母の願いよ

結晶して平和の楯になれ！

昭和30年（一九五五）8月6日、朝日新聞に載った禁止大会への詩の一部である。また民主主義婦人大会で読まれた詩の一部は以下の通り。

ああ われら女性から生まれた世界の男性たちよ

お前たちはここに今一度

母の子守唄をきかねばならぬ

神の心を取り返さねばならぬ

と、これも声高く女性の権利拡張に向って主張する。そして、次第に政治活動の深みへと向って行った。ここにきて深尾須磨子は変わった。行動する詩人として、そして反戦詩人へと。何度も述べた様に戦前の自分の軽はずみな行動に対する贖罪的な意味もそこには充分感じられる。そしてそのベクトルの極致は日本そのものへの逆説ではなかったか。『ひとりお美しいお富士さん』（一九五〇版「現代詩代表選集」）の中で盛んに茶化す富士山（＝日本）は戦後

の日本に対する批判をあらわに示していよう。それを示そう。

ヘン お富士さんだつて？

おもしろくもないよ

(略)

第一 あのポーズが気に食わないよ

あんなの叩っこわしておはぐる溝へちやいしたい

(略)

ね お富士さん

ここからおがむと

たしかにあんたは貴婦人さん

ヘン ひとりお美しいお富士さんか

毛とうさんがいうね・・・

フジヤマ サクラ ゲーシャガールって

あんたはそれで威張ってるの？

(略)

猫っ被りのお富士さん

ひとりよがりのお富士さん

あんたは破廉恥ってことござんじかい

悪の華ってのもござんじかい

(略)

ね ひとりお美しいお富士さん

よしてもらいたいね

中みは尻っぼだらけだよ

あんたはほんとおめでたいね

(略)

ひとりお美しいお富士さん

ここじゃみんながよごれるだよ

(略)

ね ひとりお美しいお富士さん

あんたの姿も

なんのことはない

ほんのちよつとばかり大きなバラックの屋根だよ

やけにからつ風がふきまくってさ

ああああ わたしゃおしっこがしたい

まさにこれこそ自分の過去の過ちへの自己批判なのだ。富士山とはきれいごと言うに日本の姿、須磨子自身の姿だ。反面から言えば、このように客観的な目を持たたということは、外から日本を見て来た事が生きていたと思いたい。五回の海外をくまなく見て来た成果なのだ。須磨子の詩編に鏤められた諸国の紋章、偉人たちの肖像、これらとちっぽけな日本とを相対化させているとも言えるだろう。

キリスト教の影

須磨子の作品には多くのキリスト教の影がみえる。例えば、『復活祭』という詩はこうだ。

復活祭

初つばめ

鬚のないイエス

初すみれ

作者の注に、イタリアのラベンナの寺院には無鬚の美男子イエスのモザイクがある、と書かれている。一九六〇年

代の詩にも『復活祭』がいくつかある。

復活祭

花びらをほどく

微風の指と

禁じられたばたんを押す

人間の指と

神よ 神よ

復活祭

断崖の

きばに

すみれが

ひとつ

復活祭

鳴りひびく

鈴らんの

銀の鈴

どこかで

水爆がはじけ

魚たちが死んでいる

いずれの詩も、春なのに、復活祭なのに、何か恐さや危うさを秘めている。南欧のカトリックの国が多いので自ずとキリストやマリアの登場は多いし、時にヤフーの国という表現もある。「村から村に日がうつり／サンタ マリアの鐘が鳴り」（「思ひ出」『永遠の郷愁』）があったり、さらに「頌歌」（同）には、

世の中に女は多いけれど

お母さん

あなたこそは女の中のただ一人の女でありました

あなたはサンタ マリアでありました

この仕合せ

これがわたしの生涯の

何にもまさった仕合せです

お母さん

サンタ マリアと母とを重ねるのは、よくある考え方だ。アダムとイヴも『最後の出発』(同)に出て来る。一九五一年復活祭の、『枝の祭』を掲げよう。

枝の祭

今朝

牝鶏が

豆炭を生む

無数に破裂する

疑問符の

気球

(キリストは蘇りたまえり)

あの世の舞台からきこえる

カチューシャの台詞

明るすぎる

枝枝の

照明

空間にぶら下がった

コークスの

地球

鶏が真つ黒い卵を生むとは、いかにも、恐くて、皮肉で暗い。このように須磨子はキリストでもゲーテでも同じレベルで詩の中に取り込む。そして、ある時はその偉人と同一化してみたり、皮肉ったりするのだ。キリストであつてもソロモン王であつても、詩のために利用するのだ。現代詩で言えば、何とも殺伐とした恐ろしい光景をいとも簡単

に書き流す。いかにも救いなど関係ない、といった風。須磨子の詩編でのキリスト教という宗教は、従って形ばかりのものであったのだ。勿論、同じ意味で須磨子にとって、仏教的な面も形だけだったようだ。恵み、赦し、慈愛といった宗教的なものが須磨子の作品には欠落しているのだ。

おわりに

須磨子は昭和49年（一九七四）3月31日に86歳で他界した。70歳の頃より戦鬪的だった精神的部分が衰えて、古里の自然のなかに安寧を見いだした。「ふだん着」（一九六五）にもある様に、「ふだん着の話をしていると／しんから生まれた土がいとしく／祖先がなつかしく／仲間がいじらしくなる」とある通り、須磨子は、太古の自然体にもどっていったのだ。

須磨子は、詩のほかには短篇小説やエッセイも多く書き残している。小説は外国を舞台としての若い青年とのアバンチュールを描いたもの、晶子流の恋愛ものが40篇ほどある。時代として、日本にいたら、とても書けないような若いセンスの文で書かれていて、今で言えば江国香織を読む感覚で読めそうだ。エッセイも様々な楽屋話が書かれているので退屈しないようだ。詩人、村野四郎が「与謝野晶子以外に女性詩人を育てなかった我が国詩史の上の貴重な女流詩人である。多くの女性に見る宿命的な、主情的ナルシズムの埋没の運命から、彼女をつねに新しい中に掘り起こし、立たしめたのは、実に、彼女のもった、すぐれた批評的知覚であった。」と語っているのは正しい。男性優位の社会で若松賤子や平塚雷鳥、吉屋信子のほかにこのような創造的、批評的な詩人がいた事を私たちはもっと誇りに思っ
よいのではなからうか。（2008・8・25）